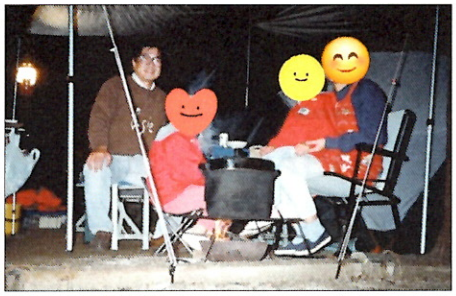
CAMP GEAR③

自作の「焚き火なべ(台)」25年の話

寄稿・エバちゃん（キャンプ場スタッフ）

僕が家族キャンプを始めたのが第一次キャンプブーム（1990年代前半～後半）前の1989年。二女がまだ1歳のころからです。高校時代にワンダーフォーゲル部でしたのでキャンプは慣れていました。キャンプ歴は半世紀以上になります。
その当時のキャンプの焚き火は今のように「焚き火台」などありません。「直火」が当たり前です。地面に穴を掘ったり、石で囲んで焚き火をしていました。それがキャンプのワイルド感だったとも言えます。しかし、当時のキャンプスペースには直火の跡が汚く残り、なかなか無残で正直言って“環境破壊”とも言える状況でした。
年間５０日くらい家族キャンプをしていた僕は、1993年、自宅で不用になっていた大きいフライパンにドリルで穴をたくさん空けてキャンプに使いはじめました。フライパンなので持ち手があり、雨が降り出すとタープの下に移動できました。灰の処理も簡単。車の助手席の下に常備していました。家族で「焚き火なべ」と言っていました。
その後スノーピークが焚き火台を開発して販売したのが1996年です。しかし高価でしたし、まだ直火キャンプが当たり前でしたから、利用するキャンパーは限られていました。
1998年にユニフレームが折り畳み脚付きの焚き火台「ファイアグリル」を販売しました。「焚き火なべ」を使っていた僕は、本体ではなくその「折り畳み脚」が欲しくてすぐに購入して「焚き火なべ」の“脚”として利用しました。
我が家の「焚き火なべ」は長年使ったため、2018年についに底が抜けたので処分しました。25年間、焚き火を楽しませてくれた「プライパン焚き火台」でした。
いまは、なぜか６種類もの焚き火台を所有して、ソロキャンからグルキャン、自宅焚き火と使い分けています。



写真上：1993年春、キャンプで「焚き火なべ」を使いはじめた。網に乗せた大なべでは大量の湯を沸かして洗い物に利用していた。
写真中：ユニフレームの焚き火台の脚を利用。七輪も使い、飯はイワタニ・プリムスの名器「2243」を使って炊いていた。
写真下：25年の酷使の末、2018年、ついに底が抜けてしまった「焚き火なべ」。

キャンプと焚き火台の役割

ほとんどのキャンパーさんが持参する「焚き火台」。ソロの方はコンパクト（Ａ４サイズ）の組み立て型が多く、ファミリーはみんなで囲める大型サイズ、と様々です。
焚き火台で調理のすべてを済ませる方もいますが、「焚き火台」はあくまでも暖を取ったり、揺らぐ火を楽しむという方もいます。どんなキャンプを楽しむのか。その「焚き火」を構成、演出するのが「焚き火台」の役割ですね。
しもはじ埴輪キャンプ場では、焚き火台の下に「防火シート」を敷いていただきます（レンタル有り）。サイトの多くが芝生なのでダメージを与えないためです。また、焚き火台が低い場合には熱で芝生を焦がすので、耐火レンガも併用していただいています。